

中心に新しい命をもたらすのが、「魔法昔話」なのである。

文化を活性化するのは、つねに荒々しい自然である。こうしてみれば、民話の構造自体に、「環境を考える契機」が深く組み込まれていることがわかる。

4、まとめ

人間は、本質的に環境を汚染しながら生きる存在である。伝統的な語りの世界でも、お爺さんは柴刈にいって里山の木々を伐り、お婆さんは洗濯に行って川を汚染している。かつて日本での生業の中心であつた農業も漁業も、環境の破壊なしにはなかつた。これは、日本だけではなく、世界中、人間の生活するところ何処にでも見られる問題である。

しかし、伝統的な社会にはおのずと共同体の規制があり、さまざまのリサイクルの試みが組み込まれていた。また、年中行事や人生儀礼のなかには環境の死を悼み、再生を祈る伝統が生かされてきた。民話の語りは、こうした野生と文化の思考をさまざまなレベルで伝えるものであろう。

地球規模で環境破壊が進む現在、地球のいたるところで伝承の儀礼と語りが失われつつあることは、決して偶然のことではない。環境を守る伝統的なシステムの存在が、忘れられつつあるのである。

(ひぐち・あつし／専修大学)

シンポジウム・地球環境と民話

幽霊マンシヨン

丸山 顯徳

一 課題

一九九四年から一九九六年までの三年間、六回にわたり「花園大学古典と民俗の会」の学生と比較民話研究会の会員を中心としたグループで奈良県吉野町の民話の総合調査を実施した。

その時の調査に協力頂いた花園大学の卒業生で、町の博物館学芸員をされている方から、初めて幽霊マンシヨンの話を聞いた。最初、この方は、奥さんからちらつと聞いただけの怪異話で、それほど深い内容ではなく、新しくマンシヨンを建設した時に幽霊が出現したという不思議な因縁話という程度であった。しかし、話を聞き進めていくうちに、民俗学で言う歴史伝承の一つ「家の盛衰」に分類される「異人殺しの話」であることが分かつてきた。しかもこの家族が殺人者になつていてるという奇妙な事件であった。したがつて、我々が刊行した『吉野町民間説話資料報告集』(名古屋大学国際開発研究科、一九九七年三月)には、人権問題にかかる話であることから、幽霊マンシヨンの話は、

資料集に掲載することはやめることにした。

しかし、私が、この話に関心をもつたのは、民間では巡礼殺しの事実譚として伝承されているものの、嘘話であろうと思われる根拠があつたからであり、その理由を知りたかつたからである。嘘と思われる根拠の第一は、幽霊マンションの類話が他の地域にあることである。沖縄本島にも幽霊マンションが伝承されており、タクシーの運転手さんから聞いたこと事があつた。第二点目は、ここでは個人の家の盛衰にかかわっているが、吉野町の最古老の一人で、昔、谷崎潤一郎が「吉野葛」の旅行に来たときに案内したという方から、明治時代に、この「巡礼殺しの話」は、この町に伝わっていたが、この家の話ではなく、外から伝わった話であったと言うことを聞いたからでもあつた。従つて、私は嘘話であるという確証は持つていた。しかし、私は、この伝承の問題について解決する手段を持たなかつた。

ある時、この「巡礼殺しの家」と言われるお宅と極めて親しい方から、この家がとても立派な社会に奉仕した家であることを知り、どうしてこんな事になつたのかを調査する事にしたのである。

築中に幽霊話が発生した。噂話は次のような話である。「うちの嫁さんの出身はこの町の出身です。そこにマンション出来ました。そのマンションが出来るまえに、土地を整地するんです。その土地の整地する時に、人が病気になつて、それで亡くなつた人もいました。気持ち悪い言う事になつて、それで、皆がやいやい言いだした。そのうちに、マンション建てたら幽霊出ると言い出したんです」。この例話は、当時の状況をよく語つてゐる。マンション建築中から事故が起こり、建築に携わった会社の社長が亡くなつた。また、工事に携わった人が転落事故をおこして死亡した。このようなことが、噂の発生源になつて、この「幽霊マンション」を約六〇名から聞いた。かなり広く知られた話である。そこで、この話を段落に分け、内容を梗概化して紹介する。

①この町にマンションが出来たが、二～三年入居する人がいなかつた。どうして入らないかと言うとマンションに幽靈が出ると言う話であつたからである。家賃を三割ほど安くしたら、入つたらしい。

②マンションの建設中は、工事した会社の人も死んだ。鉄骨を組んだ人も死んだ。皆若いのに死んだ。ブルドーザーで整地した人も死んだ。マンションを設計した人は若い人だが、自分に何時順番が回つてくるかと思ってひやひやしていた。その人の友人が、交通事故で死んだ。

③ここにマンションを作る前にブルドーザーで地面の整地

二 話の紹介

ここに紹介するマンションは、一九九〇年頃に建設されたものである。バブル経済の雰囲気がまだ残つていた時期に五階建てのマンションが建築された。ところが、このマンションの建

をし、井戸を潰した。昔から、井戸を潰したら悪いことがおこると言う。それを潰したから、怪我をしたり、偉い人も死んだりした。事故も起こった。

いらない。只の噂であった。マンションが建つ前には、そんな噂は無かつた。

④また、整地したときに床から人骨が出てきたという話を聞いた。人骨は、警察に届けた。死体の身元確認で仕事が進まなかつた。お骨をひとまとめにしてお墓に持つていつた。その人骨には、次のようなわれがあつた。

⑤ここは地主（あるいは宿屋、酒屋、金貸し）であつた。旅の巡礼の母と娘（お遍路、行者、行商）が泊まつた。お金を持っていたので殺して井戸に埋めた。台所を壊した

ら、亡くなつた人の骨が出てきた。その祟りで幽霊が出た。

⑥この家はAさんと言つた。この町でも番付けのお金持ちの家であつた。この家に道楽息子がいた。旧制中学校を中途退学して別の学校へいった。この家のボンボン言うたら

名取りの道楽息子であつた。道楽で博打を打つた。人前でも山一枚を賭けた。それで負けて、その家を売却した。財産なくして自殺した（変な死に方をした）。先祖があんなことしたから、こんな事になる。戦後間もない昭和二四五五年頃、噂がありました。このマンションの幽霊話は、その蒸し返し。

⑦賭で、その山を入れた人も死んでしまつた。また、家を買つた人も、不幸に死んでしまつた。

⑧そのあとにマンションが出来た。今現在は、なにも出て

三 モチーフの分析

私は、この話の虚構性を明らかにするために、二〇〇一年八月、現地で事実関係の調査をした。この話の建築に携わった工務店の下請けの関係者（昭和七年生まれの女性）、衰退した家と、親子三代にわたつて極めて懇意にしていた元高校教員（大正一二年生まれの男性）とその家族である。この調査によつて、世間話の発生した経緯が明らかになつた。事実と虚構の間から、歴史の中で世間話を生み出した人々の歴史感覚が段々明らかになつた。

(1) 幽霊話の出現

まず、話の発生の時期の問題である。マンションに幽霊が出現した話は、このマンションがまだ完成しない建設中に発生した。マンションが建築されたのは一九九〇年頃で、まだバブルの雰囲気の残つてゐる時期であつた。建築を担当した会社の社長が亡くなつた。この社長は、元県会議員で、長らく病状にあり入院していた。この建築とは無関係になくなつたが、マンション建設の幽霊事件と結び付けられた。また、建築中に事故死があつた。工事現場から、建築中の人が落として人が亡くなつた。不慮の事故であつた。これも幽霊事件と結び付けられた。つま

り、幽霊の仕業と解釈されたのである。

(2) 井戸の整地

この話はマンションの為に整地された家の井戸から白骨死体が発見されたという話である。マンション建築の時期に生まれた話で古い話ではない。このことは多くの人が証言した。殺害した人を捨てた場所については異伝があり、井戸というのが一人、床下が三人、藏が三人。従つて井戸がいちばん多い。さらに幽霊は、井戸からでた人骨の幽霊であるというのが一般的な伝承である。さらに話は展開して、井戸から人骨が発見され、これが警察に届けられたと言うことになる。これらは、全て事実ではない。井戸のモチーフが発生した背景には、井戸の信仰がある。建物を新築するときには、古い井戸を潰すことがある。井戸の神様は、便所の神様と共に、家の中ではもつとも神聖な神様として位置づけられているから、井戸を壊すときには、御祓いをして丁寧に祀り、井戸の中に竹をさして空気穴を作つて潰すのがしきたりである。これをしなかつたら、奇怪な事が起こつたと考えたようである。人々は井戸を潰すことに関しては神経質になっている。このマンションでは、井戸は完全に整地されおり、跡形もない。だから井戸の神様への恐れがこのモチーフの発生原因ではないかと推測出来る。

マンションのあつた家の井戸は、自宅の台所の中になつた井戸で、日常の生活に利用していた。だから殺した人を投げ込むという事は全く有り得ない。話は、井戸の実態を知らない人が、

後になつて話を作ったというのが真相である。このように殺害した人を井戸に捨てたと言う話は、全くの虚構である。

(3) 遍路の殺害

殺害された人が誰かについては、遍路（うち二名が乞食の遍路）と答えたのが二〇名。巡礼が三名。旅人が五名。行商が二名。ただの人が四名。圧倒的に遍路が多い。この地方には戦後間もないころには、まだ遍路が来ていた。笠地藏の被ぶる笠を頭に被り、下着に白い木綿の着物を着て、上着には黒い着物を羽織った姿であつた。ある女性は米一合を上げたという体験話をしている。

そこで、この町の遍路や巡礼の殺害のモチーフが伝承された時期について検討したい。発生は、明治時代に遡る。また古い順番にここに記すことにする。「江戸時代」（女性、一九一三年生、九〇歳のお祖父さんから子どもの頃に聞いた）。「大正の中頃」（男性、一九〇〇年生、この地方の話ではない。一九二〇年頃聞いた話）。「大正の終わりから昭和初年頃」（男性、一九二一年生）。「昭和五年頃」（男性、一九二一年生、祖父から聞いた）。「昭和七年頃」（男性、一九二二年生）。「昭和八年頃」（女性、一九二三年生）。「昭和一二年頃」（女性、一九二七年生）。以上の方の話をまとめてみると、最も古い話は江戸時代の事件として聞いている。しかし大正九年ごろに聞いた人の話では、この地方の話ではなかつたと言う。ところが大正の終わりから昭和初期、昭和五年頃、昭和八年頃、昭和一二年頃に聞いた人の話では、この旧家の話

と言うことになつてゐる。これらから遍路・巡礼殺しの話は、

外から伝來した話が噂話として昭和の時代になつてこの家の話に定着していつた事が分かる。

(4) この家の繁栄

昭和初期は、この家は繁栄していた。吉野では、材木産業の誇つた時代であつた。大阪で、ヨキをさしたままキャバレー通りをした人の話も知られている。吉野町にもカフェがあつた。接客女性が、吉野川で泳いでいたが、見るのが恥ずかしかつたという女性の報告がある。或る人の話では、奈良の天理へ嫁に行くのは親が心配した。天理には電気がついているのかどうか。当時の山林地主の豊かな時代の意識の反映である。この旧家は、山林地主であり田畠からあがる年貢で生活していた。昭和五年頃は、この旧家の娘が、神戸の有名な女学校に通つており、春休みなどには母親がお手伝いの女性をつれて近鉄の駅まで出迎えていた。近鉄電車が六田（むだ）の駅まで開通したのが昭和三年であつたので、開通間もない頃の事であつた。人々はとても羨ましく思つたという。この方の住んでいる村と、隣村が共同でつくつた小学校があつた。この家の当主は、大変、教育熱心であつて人柄の良い方であつた。この家の奥様は上品な方で、自ら小学校の校長の家を訪問して学校の経済的援助をしてゐた。このように学校教育にたいして援助を惜しまなかつた家であつた。こういう善行は世間では知られていない事実である。昭和にはいると、日本は不景気になり、人々の生活は段々苦し

(5) 旧家の没落

戦前、この旧家の当主の妻が無くなり、再婚した。再婚した相手との間に子どもが生まれた。続いて当主も亡くなつた。息子は大変寂しかつた。その後、息子は博打をするようになり、負けて山などを取られた。その後、再婚された女性は子どもを連れて実家に戻り、この旧家は、売りに出された。おそらく、この時期に、この名だたる旧家が売りに出されたことで、世間話が発生したものと思われる。この家の跡取りについて、様々な伝承がある。人の口には戸は立てられぬというが、言うに絶えぬ嘘伝承が民間に広まつてゐる。

この時点で、新しく話が発生している。それは「息子は博打好きだった。金に困った息子は、家に金持ちを招いて殺して埋めてしまつた。しばらくしてこの家は滅んでしまつた」。また「行人がやつて来た。ボンボンは、こそぞとばかりに、その行人から金を巻き上げていつた。そのうちに金のなくなつた行人を殺してしまい死体を隠した。その後ボンボンも亡くなつた」。このような遍路・巡礼殺しのモチーフが、新しく同時代の人々に仮託されて再生した。この話の再生は、戦後のことである。このように古い時代に、この地方に伝來した遍路・巡礼殺しのモチーフが、大正の終わり頃に、この家に仮託され、さらに戦後になつて再び、この家の息子に仮託されてくるのである。

言うまでもないが、これは事実ではない。

(6) 禿りの影響（山林の売買、時代の変化）

昭和二十五年には、この家は、次の人に買われた。大阪で電気店をしていたBという人で、元、この村の人であった。この人は、事業がうまく行かなくなり、この土地を売却した。

現在の近鉄C駅近くに、Dという喫茶店がある。その道路向かいに材木工場があり、喫茶店Dのあつた場所には工場の事務所があった。この持ち主氏がこの家を買つた。ある日、近鉄C駅で女人が電車を降りて道を渡ろうとした。この家の買い主氏は、その女性に当たり、頭を打ち耳から血を流した。それで数日経つて、この買い主氏は亡くなつた。それで、この家を売ることになつた。ここからまた、新しい伝承が発生した。「土地には栄える土地もあれば、縁起の悪い土地もある」。この地域にも強い禿りの伝承がある。この地方に新興住宅が出来た。この土地を整地するときに、この谷のお地蔵さんを一時町に移した。開発の邪魔になるということであつた。ところが、この引っ越しに関わつた者が四、五名全員亡くなつた。新興住宅地が完成したので地蔵を祀つていた元の場所を公園にしてそこに戻そうとするが、誰も移す人が出てこない。このように、祟りへの恐怖心が人々を呪縛している。

四 伝承の広まつた時期

この家をめぐる世間話が広がつたのは四つの時期に分かれている。第一期は、伝承前期と命名したい。この話は、最初は、この家の話としては、伝承されていない時期である。この時期は明治から大正の中期。周知のとおりこの話は「異人殺し」として全国に分布している話型である。何らかの理由で、この町にも伝來した。推測するに、この町は修驗道の大峯登山の上り口付近にあり、各地から山伏を始め、遍路、六部、淡島様など

の宗教者やト占などにともなう信仰芸能をもつたデコマワシ、カグラ、猿回し、万才、お札売りなども、この周辺の村々を訪れていた。これらの人々によつて「異人殺し」の話が伝來したものと思われる。第二期は、昭和初年から十二年頃までの話である。この地方の老人によると、この時期は不景気な時代であった。大学は出たけれど就職口の無い時代であった。昭和六年九月三十日には満州事変、翌年の昭和七年三月一日には満州独立と、日本は戦時体制に向かつっていた。この不景気な時代に、この家は、大変裕福であった。この家は、千両普請と言われた家であり、この家だけの先祖を祀る小さいお寺もあり、そこに尼

者で一杯になつた。しかし、幽霊マンションの方は一杯にならなかつた。二〇〇一年現在、こちらも入居者は一杯である。幽靈の話は全く無い。

さんが住んでいた。第三期は、昭和二三～五年頃である。この旧家の息子が亡くなつた。それで、この旧家が売られた事で、世間話の種になつた。第四期は、マンション建設にともなう幽霊事件である。バブル経済に浮かれた時期の強い心理的影響の残つた時期で、この時期にあわせてマンション建設の関係者が亡くなり、世間話に再び火がついたのである。

五 結論

このように話が広まる時期は四期に分かれるが、それぞれ時代の激変期である。第二期（昭和初年から一二年頃）は、戦争前夜の暗い時代。この時代は、貧しい時代であり、この家は人々からジエラシーをもたれた。第三期（昭和二三年から二五年頃）は戦後の人々の生活の苦しい時代。この家の没落の原因を古い因縁譚に重ね合わせて話が作り出された。第四期（平成二年から四年頃）は、日本が経済的に浮かれたバブルの影響によって人々の気持ちが経済的に高揚した時代である。第四期は、経済的に人々の生活が向上したが、この時代に事故が起つたことが、逆に人々の関心を呼び起こした。このように時代の流れの中で、この家は人々の関心の的になつていつた。このように見していくと、文字によらない民間における人々の歴史感覚は、根底には次のような心理が働いている。

① どうしてこの家が金持になつたかという理由を知りたい

という興味が、歴史感覚の出発点にある。旧家、お金持ちとう庶民とは隔絶した家への歴史的関心である。その理由を過去に遡つて考えるという「遡及法」である。

② この歴史感覚は、文字によらないから事実によるものではない。「事実と伝承とが混合」して伝えられる。この場合、金持ちの家は、庶民感覚では、通常の手段ではお金は儲からないから、特別な方法によってお金持ちになつたものと考える。そこから類推して伝承が発生する。それが遍路・巡礼殺しである。この話は各地に伝承された話で、これがこの家に重ねさせて伝承された。

③ 旧家の興隆や衰滅は、庶民からは特別な世界の事で興味の対象であった。そういう家の歴史の動く原因を、善因善果、悪因悪果という「素朴な因縁の論理」によって捉える傾向がある。金持ちの原因を、悪因悪果ととらえている。そのことで人々の語る話を正当化している。

④ ただし民衆は、その正しい原因を知ることはしない。話は面白い方向に展開させるだけである。そこには、金持ちの家に対する「羨望の気持ち（ジエラシー）」が込められている。無責任な無意識の悪意が働いている。そこから遍路や巡礼を殺したのが、この旧家の主人、あるいは息子であるという伝承が発生する。旧家の没落伝承には一般的に息子の博打のモチーフがみられる。そこには人々の悪意の心が内在している。

⑤ 現実の不慮の事故を、因縁話で結び付ける。因縁の原因を

「祟り」に結び付けるのは民衆の生活感覚の常道である。人々にとって、最も恐ろしい信仰と結び付けている。人々の歴史感覚の根底には、理解出来ない現象がある。これを説明するのが、

祟りという民間信仰である。白骨が井戸から発見されたというモチーフは、このような祟りの民俗心理と重なっている。

⑥ この話が語られた時代は、不景気、戦争、敗戦後の荒廃した日本、高度経済成長のバブル期といった時代である。吉野川流域では、木材産業の影響によって経済生活に様々な影響を受けている。まさに「自然環境が開発に伴う変化」によつて激変した時期である。人々はこのよだな時代に、「祟り」という古い信仰や「人殺し」という奇妙な話題を伝えている。過去と現在が、「殺人」事件と「祟り」という古い信仰で奇妙に結びついているのである。

【補注】

この民話の基本資料は、花園大学古典と民俗の会、比較民話研究会の合同調査団により、平成六年三月、平成六年八月、平成七年三月、平成七年八月の四次にわたる調査の中で採集されたもので、この時のテープ、カードを基本資料とした。また、この話を整理した田中健太郎君の資料も一部参照した。

(まるやま・あきのり／花園大学)

シンポジウム・地球環境と民話

民話のなかの里山・川・海と

人びとの暮らし

米屋 陽一

一 はじめに

日本列島の春夏秋冬のなかで育まれてきた民話（昔話・伝説・世間話）や童唄などには現在取り沙汰されている「環境」の問題が横たわっている。環境そのものがテーマになつてしたり、背景に潜んでいたり、さりげなく語られていたり歌われていたりもある。それらを確かめながら、口承文芸の成立事情・伝承の底流にひそむ人びとの意識などにふれてみたい。それは現代民話の発生にも連なる。川田順造は鳥の鳴き声などの「聞き做し」を「音の共感覚」（『声』）、吉沢和夫は「身の周りの動物たちの中に意味を見出そうとする想像力のあり方」を「共意識」（『椿の湖』）と呼んでいる。この用語（造語）からも民話と深くかかわる人びとの生き方・暮らし方の説明ができるよう。数少ないが取り上げた例話を通して、これまでの自然と人びとの共生のあり様と口承文芸の役割の一端が明らかになるであろう。それは同時に、これから「環境」の問題を解く鍵にもなるは